

平成16年度北海道男女平等参画チャレンジ賞受賞者一覧

【輝く女性のチャレンジ賞】

氏名(年齢)	星川 光子(53)	現職等	NPO法人「いぶりたすけ愛」理事長 (公職等)(財)さわやか福祉財団さわやかインストラクター(北海道初)
住所	登別市		
<p>《受賞理由》</p> <p>平成5年の登別市女性国内派遣研修への参加をきっかけに、老人介護の分野に着目し、勉強会やビデオ上映会を自主的に開催し、卓越した行動力で市民勉強会グループを新しい福祉形態の市民活動にまで成長させ、平成7年「登別ライフケアを考える会」を設立した。そのサービス内容は、サービスを提供する人、サービスを受ける人の助け合いを基本とした市民相互扶助型に「有償制」や「時間預託」を取り入れたもので、当時の道内では例をみない新しい福祉形態である。</p> <p>平成11年、道内で4番目、胆振管内で初めてのNPO法人の認証を受け、介護保険の適用サービスを提供する法人へと発展させた。NPO法人認証取得の先駆者として道内各地で講演するほか、北海道初の(財)さわやか福祉財団さわやかインストラクターの委嘱を受け、ボランティア活動や団体設立支援の指導・助言にあたっている。</p> <p>主婦5名の勉強会からスタートし、会員850名余を擁する団体へと成長させた活動の波及効果は大きく、現在、道内の他地域においても、助け合いのグループが結成されるなど、登別から発信した活動が広がりを見せている。(芽室町・伊達市などで結成)。</p>			

【輝く男性のチャレンジ賞】

氏名(年齢)	馬淵 楷(56)	現職等	北海道東海大学教授
住所	札幌市		
<p>《受賞理由》</p> <p>平成13年に、インターネットを通じて世界の子どもたちに各国の絵本・童話・民話などを提供する「国際デジタル絵本学会」を設立し、ユニークな活動をしている。デジタル絵本は、世界のどこからでもインターネットに接続でき、絵本特有の手づくりの画像を見ながら11カ国語に翻訳された童話や民話などに触れることができるため、子どもたちに世界の文化理解を深める機会を提供するとともに、子どもたちの創造力を育み、コミュニケーションづくりをすすめる新しいシステムであり、IT時代にふさわしい形態の「育児支援」といえる。発想の素晴らしさに加え、多くの主婦がイラストを作成し、国際結婚している夫妻が翻訳に協力するなど市民参加型の手づくりを提案したことにより、国内外の多くの人々の共感と善意を得て、オリジナル性を生かした絵本づくりを行い、世界に配信し、創造性豊かな子どもの成長を通じ育児支援の新たな形を展開している。</p> <p>IT後進地域へのデジタル絵本の普及やそのための人材育成、障害者にも楽しめる絵本の作成などを目指し、先駆的な活動を精力的にすすめている。</p>			

【輝く北のチャレンジ賞】

氏名(年齢)	株式会社 アイワード 代表取締役 木野口 功	現 職 等	印刷業
住 所	札幌市		
<p>《受賞理由》</p> <p>昭和49年の会社再建時点から、男女の別・健常者と障害者の別なく待遇し、能力に応じて幹部社員に登用する方針を採用している。</p> <p>現在、全社員に占める女性社員の割合は3割となっているが、多くの女性社員が役職者として活躍しており、特に、会社の経営に参画する立場である取締役は、12名のうち5名が女性である。</p> <p>女性を特別に優遇する制度はないが、育児休業を取得した後も就業を継続している女性社員が多く、男性社員も家事のために休暇を取得しやすく、若い社員が多いので、「次は自分の番」という意識や「子どもは社会の財産」との考えを持ち、休暇取得中の社員をカバーする社内の雰囲気がある。</p> <p>男女の別なく生き生きと働ける職場づくりに取り組み、仕事と家庭の両立を支援している会社の姿勢が伺われる。</p>			

平成17年度北海道男女平等参画チャレンジ賞受賞者一覧

【輝く女性のチャレンジ賞】

氏名	田澤 由利 <small>たざわ ゆり</small>	現職等	株式会社ワイズスタッフ代表取締役
住所	北見市	推薦者	北見市長
<p>《受賞理由》</p> <p>奈良県出身。昭和60年電機メーカーに入社、コンピュータ関連の技術、企画、販売促進等の業務に従事。平成3年に夫の転勤と妊娠が重なり退職せざるを得なくなったが、社会と関わり続け自分の能力を生かしたいとの思いから、フリーライターとして独立。夫の転勤による5度めの転居で、平成9年に北見市に転入、子育てや家事を行いながら在宅でフリーライターとして活動。平成10年に「ネットオフィス」を実践するため有限会社ワイズスタッフを設立。設立当初、社員は社長一人で、ネットメンバーと呼ぶ契約在宅ワーカーが全国や海外に20人。数人がチームとなりホームページ作成やアンケート収集・分析の仕事をインターネットでやりとりしてこなす。転勤で東京に赴任していた夫が平成13年に北見に戻り、取締役として経理や総務を担当、会社を支える。平成17年に株式会社組織変更、道の委託事業を受託するほか、全国を視野に入れて活躍しており、その活動は高く評価されている。</p> <p>3人の子を持つ主婦であり、会社の社長であり、コンピュータ雑誌や書籍の執筆を手がけ、大学の非常勤講師のほか、各種講演会の講師も務め、幅広く「まちづくり」にも参加するなど、多岐にわたり活躍している。</p> <p>家庭でも手軽にインターネットを利用できるという現代の社会情勢を的確に把握して起業し、子育てと仕事を両立させており、子どもを持つ親にとって身近で模範的なモデルと言える。また、従来の固定概念にとらわれることなく、新たな発想によりネット上に会社を展開して、ネットビジネス界の代表的存在となっており、今後も様々な分野でその活躍が期待される。</p> <p>出産や子育てなど、仕事との両立で女性を葛藤させる壁を打ち破るワークスタイルとしてのSOHOを、組織として運営する会社をネット上に作るという、置かれた環境の中で、時代のニーズを捉えて自分の持つ能力、経験を十二分に生かすその発想と行動力は、多くの人々に刺激を与え、チャレンジの幅を広げるモデルとなる。また、ネットメンバーとして採用された人々も自分の能力に応じて働けるシステムは在宅ワークの新たなあり様を提示しており、家族の介護や育児を抱える女性にも希望と元気を与えてくれる事例と言える。さらに、女性だけでなく在宅ワークをせざるを得ない男性や高齢者も参加できるワークスタイルは地域社会の振興への貢献も期待される。</p>			

【輝く北のチャレンジ賞】

氏名	NPO法人お助けネット	現職等	代表 <small>なかや みちえ</small> 中谷 道恵
住所	白老町	推薦者	白老町長
<p>《受賞理由》</p> <p>地域の「子育てママ」たちの実体験や小さな気付きから始まった活動で、初めはノウハウもなく試行錯誤の毎日だったが、子育てを応援したい、行政任せでなく「まず自分たちで」という熱意により支えあいの輪が広がり、現在ではNPO法人として会員150名を数えるまでに至っている。</p> <p>平成3年に町内初の育児サークルを開設、以後、毎年約50組の親子が加入し、現在も幼児期の親子の交流、情報交換の場として重要な役割を担っている。平成10年から託児サービスを開始、個人託児だけでなく集団託児も行い、講演会や学習会等への子連れでの参加が増える。また、子育て通信など多くの情報誌を発行、平成13年には父親のための子育て応援ブックを製作、身近な育児書として道内各地から注文が相次いでいる。インターネットによる情報交流、育児相談、子どもの学習アドバイス等も実施しており、子育ての不安や悩みを抱える親たちの心の支えとなっている。さらに、子育てやDVなど男女平等参画に関わる研修会やイベント等社会教育事業も積極的に主催している。</p> <p>会員が少しずつ知恵と汗を出し合い、それぞれの負担を減らすことで、継続した活動が可能となっており、活動内容も自分たちの生きた体験を活かして、行政では行き届かない育児サークルの立ち上げや、病時託児を含む託児システムの構築など先駆的な取り組みを行い、まちづくりの担い手として大きな原動力となっている。会員の主婦層にとって社会参加・社会貢献の場として貴重な存在であり、また、活動で培った知識や経験を活かして講演活動や行政の各種委員会等に参画する会員も増えている。毎年多くの視察受入れや講演を行い、全道の仲間たちに経験やノウハウなどを情報提供しており、地域密着型の団体活動の先進的好事例として多くの注目を集めている。</p> <p>平成16年にNPO法人となり、町の事業を受託するなど、活動の幅を広げている。平成18年には子育てサロンの開設やファミリーサポート事業への参入も予定しており、今後、町の「子育て応援団」として、さらなる飛躍が期待される。</p> <p>病児保育への取組は先駆的であり、仕事を持つ親の支えとなっている。行政に依存することなく、地域の核となって、広い範囲に波及している。無理なく着実にステップアップしており、構成員の力がその個性や能力に応じて様々に活かされ、また、会員の夫、父親たちも巻き込んで展開しており、今後の活動にさらなる広がりが期待される。</p>			

【輝く北のチャレンジ賞】

氏名	西川マザーウッズ	現職等	会長 船越 孝子
住所	静内町	推薦者	水産林務部（日高森づくりセンター所長）
<p>《受賞理由》</p> <p>平成9年発足。農家の主婦たち10名が地元の資源を生かし女性の立場で地域に貢献できることを模索しながら活動している。</p> <p>主な活動としては、町有林や自治会有林の整備や緑の少年団の育成指導のほか、二十間道路桜並木の桜の葉を塩漬け加工して毎年3月3日に桜餅を地元小学校に届けたり、森のめぐみを利用したリースづくりを行い、駅構内の売店や町の産業祭で販売して活動資金の一部としている。また、山づくり技術や梅の管理技術に関する研修会、他地域のグループ、女性グループとの交流会なども実施している。</p> <p>男性と女性、大人と子どもがそれぞれ出来ることを分担し合いながら協力して作業を行うことで、地元山林を住民が一体となって整備でき、さらに林業技術の伝承と山林への理解が深まり、住民同士の理解を深めることにもつながっている。</p> <p>近年は、地元自治会の「梅の里づくり」に協力し、夫たちの林業グループとともに梅の木の植栽や管理に携わり、梅の実を使った食品加工に取り組み、試行錯誤で商品開発を続け、平成16年度から本格的に販売を開始、将来的には西川地区が梅の里として梅の花の名所に、そして、梅の食品が地域の新たな特産品になることを目標としている。</p> <p>地道な努力が自己資金の着実な確保と活動内容の充実につながっており、やる気と団結力があれば新しい取組が可能というモデル的な存在である。</p> <p>夫や子どものグループと協力して行う様々な地域貢献活動は、男性も女性も、大人も子どももそれぞれが持つ個性と能力を活かし、地域で人と人が支えあうことの大切さを次の世代に伝えている。こうした地域に根ざした活動は、農村女性の親睦を深め団結力を強めており、その活動は地元のみならず周辺地域からも評価されている。</p> <p>構成メンバーが30代から50代と比較的若く活気にあふれており、今後のさらなる活躍が期待でき、また、構成員が地域でいきいきと活動する様子は子どもたちにも大きな影響を与えており、次の世代へ活動が引き継がれていくことが期待できる。</p> <p>男性との協力だけでなく、子どもの育成でも様々な取組を行っており、男性や子どもたちとのいい意味の役割分担により、地域が一体となって豊かな自然を活かした魅力あふれる活動を行っている。道内各地との交流の広がり、積極性も見られ、本道における第一次産業分野の女性たちの活動の励みとなる事例と言える。</p>			

平成18年度北海道男女平等参画チャレンジ賞受賞者一覧

【輝く女性のチャレンジ賞】

氏名	いとう ちず 齋藤 ちず	現職等	NPO法人コンカリーニョ 理事長
住所	札幌市		
<p>《受賞理由》</p> <p>愛媛県出身。北大に進学して演劇に魅せられ、役者として劇団設立に関わり、劇団解散後は演出家、プロデューサーとして活躍。1995年から、昭和初期建造の石造倉庫を改装した劇場「コンカリーニョ」を演劇、音楽、ダンスなど様々な演目で運営。多彩なメニューは各地の民間ホールでも参考とされる。</p> <p>2002年の都市再開発計画による劇場閉鎖後、再建に向けた委員会の代表として精力的に建設資金集めに駆け回るとともに、札幌市の施設「ことにパトス」の管理運営や道の文化事業の受託、地元商店街の催しの企画運営など、様々な活動に取り組む。</p> <p>2006年5月、多くの人々の支えにより、地域とひとと文化を結ぶ「生活支援型文化施設」として劇場を再建。地域の人々を役者に、地域の歴史を元にした創作劇など、地域の文化拠点として様々な事業を企画、また、劇場の中だけでなく、劇場の外でも地域コミュニティに寄与する活動を行っている。</p> <p>単なる劇場運営に留まらず、地域づくりと芸術文化活動を結びつけるユニークな取組を、持ち前の柔軟な発想と行動力で次々と展開しており、その独創的な運営方法は全国的にも注目を集めており、また、地域に密着した地道な活動で、地域の人々にも「まちの劇場」と親しまれている。</p> <p>さらに、活動に共感して集まった運営ボランティア、スタッフが、性別に関わりなく、各々が自分のできることに取り組める、懐の深い活動の場となっている。</p> <p>現在高校生になる長女が生まれてからも、パートで働きながら演劇を続け、離婚を経て、様々な困難もありながら「子育てと仕事と芝居」をこなしてきた。発想がユニークであり、様々なアイデアをこらし、自ら築き上げた豊かなネットワークを生かして、様々な企画の実現に精力的に取り組んでいる。試行錯誤しながら、自らが決めた道を進む姿は、多くの道民に元気と希望を与えるものである。</p> <p>初代劇場のユニークな運営の後、劇場閉鎖により活動拠点が失われた期間も活動は休むことなく、また、日々道内外の情報収集や自己研鑽に怠りなく、シンポジウムや講演等にも積極的に参加している。今後も、芸術文化を生かしたまちの拠点づくりを目指し、より一層多彩な活躍が期待される。</p>			

【輝く女性のチャレンジ賞】

氏名	おかだ ミナ子 岡田 ミナ子	現職等	有限会社トゥリリアム・オカダ・ファーム 取締役
住所	遠軽町		
<p>《受賞理由》</p> <p>東京都出身。酪農学園大学卒業後、1974年に結婚。旧白滝村で実習後、1976年白滝村初の新規就農者として夫婦で酪農を開始。その傍ら肉加工品を販売、1996年からソフトクリームの原料の製造販売に乗り出し、同年、畜産加工品部門として、「有限会社トゥリリアム・オカダ・ファーム」を夫とともに設立し取締役就任。経営に参画しながら、家庭の主婦として1男2女を育て、経営規模、事業等の拡大を着実に進め、現在では白滝地域の優良酪農家の一員として地域で活躍している。</p> <p>畜産分野の生産から販売に係わる酪農の多様性を見いだす活動は先駆的であり、また、厳しい気候条件のなか家族経営の楽しみや、農業のすばらしさを多くの人たちに理解してもらう活動に取り組んでおり、営農や産直の傍ら、月刊誌の編集委員や新聞のコラム執筆のほか、講演を行うなど、仲間や消費者に「田舎だから、農家だから、女性だからできること」のメッセージを全国に発信している。1998年には入植後23年間の農業活動を本にまとめ、仕事の楽しさ、農業への思いを伝え、全国の消費者・農業者にエールを送った。</p> <p>農業に夢を持つ就農希望の研修生を多く受け入れており、自己の経験を生かした悩み事相談やアドバイスを、研修生の母親代わりとして慕われている。また、地域の子どものためにピアノ教室を開き、音楽の楽しさを教えるとともに、文化活動にも熱心に取り組んでいる。</p> <p>全国女性農業経営者会議副会長、北海道農業担い手育成センター就農アドバイザー等の役職を歴任、講演会活動等の支援も併せて行い、普及事業を通し農畜産加工グループに起業活動のノウハウを提供するなど、活動のレベルアップに大きく貢献している。</p> <p>多くの業績に裏打ちされた卓越した指導力、誠実な人柄、幅広い知見や見識、業種にとらわれない仲間づくりなど、社会の模範となるものであり、生産者と消費者との交流による農業の活性化、多様化を積極的、行動的に図り、農業者に夢と希望を与えている。自らの理念を積極的に外に発信しており、今後も、地域農業の振興、町の活性化、担い手育成など、一層の活躍が期待される。</p>			

【輝く女性のチャレンジ賞】

氏名	ふるうち かずえ 古内 一枝	現職等	株式会社スポーツショップ古内 取締役専務
住所	札幌市		

《受賞理由》

商店街の再生、コミュニティの再生という現代の地域が抱える課題に、行動力あるリーダーとして真正面から精力的に取り組んでいる。

専務を務める商店で独自の少年野球大会等を主催するほか、地元の商店街では、イベント実行委員会の中核的メンバーとして地域のコミュニティ活動に取り組んでおり、郊外大型店との競合で生鮮食料品店が皆無になった石山地区で、住民と商店街との対話で実現した「いしやま朝市」では実行委員会代表を務める。

また、地元の商店街や道の商店街振興組合女性部の活動で、商店街の活性化や組合員の資質向上を図る取組を積極的に企画・実施するなど、道内商店街の活性化と人材育成に尽力している。

こうした様々な地域コミュニティ再構築のための活動により、地域住民・各種団体等との連携が強化され、地域への結束が生まれている。地域住民参加によるまちづくり活動の成功事例として道内の商店街や女性部活動のモデルとなるものであり、今後、他地区への波及も期待される。

17年度から北海道商工業振興審議会委員として、また、17年度に設置された当審議会部会の小売商業振興方策検討部会部会員として、道の中小小売商業振興施策・方針の検討過程に参画、生活者・母親・商業者として、日頃の商業活動や地域コミュニティ活動など現場感覚に根付いた発言・提言などを行っており、女性が商店街や地域を考え、意見を発信しなければならないとの思いを行動で示していると言える。小売商業振興施策の検討過程への女性委員の参画は先駆的であり、また、地域のコミュニティ活動でも実行委員会の代表として積極的に取り組んでいる。女性らしい視点と感性で今までの枠にとらわれない活動を展開しており、女性の活動領域を拓いている。

地域コミュニティ・まちづくりにおける、少子高齢化、子育て、防犯治安、交通、商業、文化など様々な分野にわたる課題に関して、関係者を巻き込みながら活動を広げており、今後も地域住民・各種団体等と連携して、様々な分野での活躍が期待される。

平成19年度北海道男女平等参画チャレンジ賞受賞者一覧

【輝く女性のチャレンジ賞】

氏名	湯浅 優子	現職等	つっちゃんとう子の牧場の部屋 経営
住所	新得町		
<p>《受賞理由》</p> <p>1974年に東京から農業実習生として新得町へ。翌年、地元青年と結婚してから酪農に従事。1996年から日本で初めての酪農家のファームイン「つっちゃんとう子の牧場のへや」を開設。</p> <p>2001年には(社)中央酪農会議の酪農教育ファーム認証牧場となるなど、酪農家のファームインの先進的な例として、新たな事業モデルとなっている。</p> <p>ファームインでは、「無理をしないこと、自然体でいること」をモットーとし、一日に一組のみの宿泊客を受け入れていて、乳搾りやアイスクリーム、ジャムづくりなどの農村ならではの滞在型の交流が好評で、その温かい接客にリピーターが多い。</p> <p>また、グリーンツーリズムやグランドワークの会の役員として、食と農に関する活動に積極的に関わるほか、「北海道スローフード・フレンズ帯広」の支部リーダーとしてスローフードの普及・啓発にも努めるなど、地域に根ざした活動を行うとともに、講演会やシンポジウムにおいて、広く消費者に農村・農業の素晴らしさを伝える活動などにも積極的に取り組んでいる。</p> <p>農業に積極的に取り組み、女性の感性を生かし、グリーンツーリズムという新たな分野に挑戦し、農業の持つ多面的な可能性を拓き、観光・癒しの場・教育の場へと活かそうとするこうした活動は、地域の発展に資するとともに、極めて先駆的なものである。</p>			

【輝く女性のチャレンジ賞】

氏名	谷 あゆみ	現職等	ばんえい競馬調教師 谷厩舎経営
住所	帯広市		
<p>《受賞理由》</p> <p>奈良県出身。帯広畜産大学卒業後、1988年に〈シンザン〉で有名な浦河町谷川牧場に就職、翌年から種馬所に配属となり、シンザン等の世話係となる。1993年「ばんえい競馬」厩務員となり、2005年「ばんえい競馬」史上初めて女性として調教師試験に合格。翌2006年に10頭の馬で厩舎を開業した。</p> <p>その年秋、「北海道市営競馬競争組合」から帯広市を除く3市が撤退を表明する『ばんえい競馬の存続』問題が発生。ばんえい競馬の廃止は、ばんえいに携わる人々が職を失うという問題や、ばん馬の行く末の問題ばかりでなく、北海道の開拓の歴史である「馬耕文化」を後世に伝えることができなくなるといふことでもあるという考えから、自ら積極的に街頭での活動等を行い、「ばんえい競馬」存続のためのアピールを行った。</p> <p>さらに、ばんえい競馬が存続に揺れる中で、馬を題材にした絵本の発行や新聞コラムの執筆、「馬と馬文化」などについての講演を行うなど、地道な活動と努力によりばん馬・北海道の馬文化発信に努めてきた。</p> <p>女性として、初めてばんえい競馬における調教師として起業し、また、ばんえい競馬、ばん馬への強い思いに支えられ地域に根ざした馬文化の発信を続ける姿は、「ばんえい」という分野に止まらず、多くの道民に勇気を与えるものであり、困難の中で新たな分野を自ら切り開く女性として広く他の女性のモデルとなるものである。</p>			

【輝く女性のチャレンジ賞】

氏名	川上 博美 <small>かわかみ ひろみ</small>	現職等	株式会社コサイン社員 家具製作
住所	旭川市		
<p>《受賞理由》</p> <p>1998年地元の道立旭川高等技術専門学院在学中に、現在在籍の会社の製品に出会い、感激し、こうした製品を作っている会社で働きたいと、同学院修了後入社。</p> <p>入社後は一貫して、旭川の代表的な産業である木製家具の製造業務に従事し、たゆみない努力と旺盛な研究心により優れた技能の習得に努めた。</p> <p>1998年から2年連続して技能五輪全国大会に出場し、1998年は3位、1999年には、家具部門としては全国初の女性の優勝者となった。</p> <p>男性技能者の多い家具製造現場において、女性の繊細な感性や柔軟な発想を生かした家具の製作を進め、木工家具の技能においては、道内若年技能者の中で第一人者と言われている。特に製造ラインの中で加工機械を駆使し高い精度で小木工製品を仕上げる技能は高く評価されている。</p> <p>現在、更に高い技術を持った技能者とし、また後輩技能者を育成する若き指導者として一層の活躍も、期待されているところである。</p> <p>女性の少ない家具製作の分野において、地元で学び、地元企業で技能を磨き、地元の文化、産業の担い手として努力を重ね、初の女性の優勝者として全国的な評価を得たことは、女性の技能者のモデルであるとともに、多くの、特に若い女性に勇気と希望を与えるものである。商店街の再生、コミュニティの再生という現代の地域が抱える課題に、行動力あるリーダーとして真正面から精力的に取り組んでいる。</p>			

平成20年度北海道男女平等参画チャレンジ賞受賞者一覧

【輝く男性のチャレンジ賞】

氏名	坂田 秀明 <small>ひであき</small>	現職等	置戸町観光協会事務局長
住所	置戸町		
<p>《受賞理由》</p> <p>美瑛町出身。北海タイムス、西武百貨店、全日空、マイカル、オホーツク・ガリンコタワー常務を経て、2007年4月、公募で置戸町観光協会事務局長に就任した。</p> <p>勤務した各社において旅行部門を担当した経験を活かし、自ら観光客誘致のため全国の旅行会社に営業に出向いている。また、新聞社勤務の経験から、マスコミの影響力、活用が重要であるという認識のもと、連続的にメディアに情報を発信し、置戸には常に新しい何かがあるというイメージを醸成し、経済効果はもとより、置戸の認知度アップに成果を上げている。</p> <p>置戸には観光の核となる宿泊・観光施設がない。しかし、オケクラフトセンター（町運営の木エクラフト館）へのツアーバス誘致からスタートし、昼食、冬のそり遊び、雪かき体験などのメニューを増やしていった。宿泊施設がなく、滞在型観光地になりえないというマイナスポイントを「日本一の通過型観光地」として売り出すことでセールスポイントに逆転させた。</p> <p>また、海外営業を行うにあたり、英語・中国語に堪能な女性観光アドバイザーを登用。女性の活躍が重要！をモットーとしている。</p> <p>限られた資源を活用した観光戦略で、地域の活性化につなげたことは、同じく観光で地域振興を目指す他市町村を鼓舞するモデルである。</p>			

【輝く北のチャレンジ賞】

氏名	レディース100年の森 林業グループ <small>たかのほし あつこ</small>	現職等	代表 鷹嘴 充子
住所	南富良野町		
<p>《受賞理由》</p> <p>1990年に不在地主が所有する山林が売りに出されたことがきっかけとなり、カラマツ林約13haを10区画分割し、10人の女性が山林所有者となり、翌年6月に「レディース100年の森」を道内初の女性林業グループとして発足させた。</p> <p>発足後、「森と人との結びつき」をテーマに自ら枝打ちや下刈り作業を行いながら、自己研鑽と地域環境づくりのため森林林業に関する視察研修を行うとともに、自らの森を会員や他のグループなどとの交流の場にするため、「実習林」とし、地場産カラマツを利用したログハウスを建設し、研修の場としている。</p> <p>また、「森林を育て、水資源や環境を守る」をテーマに森林ボランティアグループ「緑とエコサポーターネット」との植樹、鶴川漁協女性部との「お魚殖やす植樹運動」など他の分野との交流を行い、地域の親子や子どもたちを対象とした森林教室の開催や公共施設などへの花壇の設置など地域環境づくりの活動を積極的に行っている。</p> <p>男性社会と思われがちな世界で、女性ならではの視点と感性で山と向き合い、森林の大切さ、森との共存、癒しの大切さを積極的に発信している。長きにわたる活動により、他の地域に新しい組織が結成されるなど広がりを見せつつあり、さらなる活躍が期待される。</p>			

【輝く北のチャレンジ支援賞】

氏名	札幌市立藤の沢小学校保護者と教師の会	現職等	会長 星 卓志
住所	札幌市		
<p>《受賞理由》</p> <p>札幌市では、児童会館などの整備は、順次行われているが、児童数の少ない小学校は優先順位が低く、当小学校から最も近いミニ児童会館までは、1.5km離れており、低学年の児童が通うのには困難であった。共働きの家庭では、一人で留守番をせざるを得なくなり、なかには、ミニ児童会館がある小学校がいいと他の小学校に越境入学させる保護者もいた。このことに強い危機感を感じたPTAは、自らの手で児童会館と同様なものをつくろうと取り組み始め、保護者同士の意見交換会を開催、学校、札幌市等との協議を進め、小学校の空き教室を活用した放課後の子どもの居場所（小鳥の村子ども館）としてスタートした。子どもの管理には、教員経験の豊富な管理者のほか、校区内から公募した5名の補助員が有償ボランティアとして交代で従事している。事業費の大半は、管理者及び補助員への謝金であり、運営費は、札幌市からの委託料、PTA会費の値上げ分、延長利用料金で賄っている。</p> <p>管理者等のほか、さらに地域在住の高齢者の方に参加してもらい、その方達の特技を活かしたプログラム（昔の遊び、スポーツ、読み聞かせなど）を多彩に提供している。</p> <p>開設後、保護者へのアンケートを行った結果、「非常に良かった、どちらかといえば良かった」と回答した割合が93%に達するなど、高評価を得ている。子どもにとっても、他の学年の児童との交流や様々な体験ができ、保護者にとっては、安心して仕事に行くことができるなど、子どもを預けられる場ができたことで、仕事のほか、様々な可能性が広がるとともに、PTA活動への参加もしやすくなった。</p> <p>保護者、学校、地域住民が一体となった、子育てしやすい環境づくりは、親にとっても子どもにとっても安心する社会であり、他の地域においても取り組みが期待できるモデルである。</p>			